37.

616-001.16:626.18

臨牀的眼處置ノ前眼部組織ノ生體

染色性ニ及ボス影響ニ就テ

第2報 理學的處置

岡山醫科大學病理學教室 (主任田村教授)

大 森 操

[昭和9年5月30日受稿]

*Aus dem Pathologischen Institut der Okayama Med. Fakultät**(Direktor: Prof. Dr. O. Tamura).*Über die Einflüsse der ophthalmologischen Behandlungen
zur Vitalfärbbarkeit des vorderen Augengewebes.

(II. Mitteilung.)

Physikalische Momente.

Von

So Ohmori.

Eingegangen am 30. Mai 1934.

Verfasser hat vorher im ersten Kapitel die Einflüsse verschiedener Arzneimittel auf die Vitalfärbbarkeit des vorderen Augengewebes mitgeteilt. In diesem zweiten hat er experimentelle Versuche über die Einflüsse der gewöhnlich klinisch gebrauchenden physikalischen Behandlungen auf die desselben an den Kaninchen angestellt und zu folgenden Schlüssen gelangt.

1) Sowohl warme Umschläge, als auch Dampfumschläge vermindern im allgemeinen die Vitalfärbbarkeit des

vorderen Augengewebes, vor allem des Irisgewebes.

2) Im Gegenteil, kalte Umschläge befördern dieselben.

3) Diese Vorgänge kommen vielleicht aus denselben Gründen, wie er sie im ersten Kapitel bewiesen hat; nämlich der erste kommt aus der Beförderung des Farbstoffmetabolismus der vitalfärbbaren Zellen (hauptsächlich der histiozytären Zellen), und der zweite aus der Verminderung desselben.

(Autoreferat.)

内 容 目 次

第1章 緒 言

第2章 實驗方法

第3章 實驗成績

其1 溫罨法試験

其2 冷罨法試験

其3 蒸氣罨法試験

第4章 考 按

第5章 結 論

第1章 緒 言

眼溫度ニ關シテハ、Galezowski, Michel, Dohnberg, Silen, Giese, Hertel, Nelson, Wessely, Krückmann, 松尾, 武藤氏等ノ研究アリテ、之等諸氏ノ研究ヲ綜合スルニ、大體ニ於テ前眼部ニ於ケル溫度ハ、體溫又ハ直腸溫度ニ比シテ低溫ヲ示シ、殊ニ角膜面最モ低シ。罨法ハ眼組織ニ對スル、溫熱的作用ニヨル療法ニシテ、Silex 以來 Giese, Hertel 等ノ研究アリ。又最近武藤氏ノ詳細ナル研究アリ、氏ニヨレバ高溫ノ眼罨法ヲ行フ時ハ、前房水ノ蛋白質含有量ハ、罨法持續中漸次増量シ、冷罨法ニヨリテハ、罨法當初一時極メテ輕度ノ増量アルモ、寒冷作用ガ、虹彩毛様體ノ血管ヲ收縮スルニ至レバ、漸次蛋白質含有量減退スト云フ。要之、溫罨法ハ眼内ノ物質代謝ヲ亢進セシメ、榮養ヲ佳良ナラシメ、冷罨法ハ眼内物質代謝ヲ緩漫ナラシム。又溫度ト生體染色トノ關係ニ就テハ杉山氏ノ研究アリ。即チ氏ハ室溫及ビ 37°C ノ孵卵器中ニ置キタル蛙竝ニ恒溫動物タル「マウス」ノ生體內ニ「ノイトラール」赤(鹽基性色素)又ハ「トリヂン」青(酸性色素)水溶液ヲ注入シ、生體顆

粒染色及ビ生體血管彈力板染色ノ時間的消長ヲ檢シテ、攝氏約 25° ノ室溫中ノ蛙ニ於ケル、生體鹽基性色素攝取ニヨル染色顆粒ハ色素液ノ注入後、比較的徐々ニ現レ、且長時保存サルルモ、「マウス」及ビ 37°C ノ孵卵器中ノ蛙ニ於ケル夫レハ、極メテ迅速ニ現レ、且1日以内ニ殆ド消失シ、又生體酸性色素攝取ニヨル染色顆粒ノ出現及ビ消失ハ生體鹽基性色素攝取ニ於ケル夫レニ比シテ著シク遲延スレドモ、此場合ニ於テモ室溫中ノ蛙ニハ最徐々ニ染色顆粒ヲ現シ、「マウス」及ビ孵卵器中ノ蛙ハ比較的迅速ニ之ヲ現スコトヲ認メ、氏ハコノ現象ヲ溫度ノ上昇ガ細胞膜ノ色素ニ對スル透過性(Permeabilität)ヲ増進セシムルコト生體內ニ於ケル色素ノ擴散速度ガ溫度ニ正比例スルコト及ビ顆粒基質表面ニ於ケル色素ノ吸着量ハ溫度ニ反比例スルコトニヨリテ説明セリ。

余ハ之等溫罨法竝ニ冷罨法ガ前眼部組織ノ生體染色性ニ及ボス影響ニ關シテ實驗ヲ行ヒ、尙ホ溫罨法ト殆ド同一目的ノモトニ適用サルベキ、蒸氣罨法ニヨル夫レヲ併セテ實驗セリ。

第2章 實驗方法

溫罨法ハ眼瞼上ニ綿紗2枚ノ間ニ、脫脂綿ヲ入レタルモノヲ載セテ輕ク固定シ、之ニ約 56°C 乃至 60°C ニ溫メタル 2% 硼酸水ヲ滴下シ、眼瞼上ノ溫度ヲ常ニ 46°C 乃至 50°C ニ保タシメ、1日2回、毎回 60 分間持續セリ。然ル時ハ結膜囊内ハ罨法施行中約 40°C 乃至 41°C ノ溫ヲ保有ス。

冷罨法ハ上記綿紗ヲ眼瞼上ニ固定シ、綿紗ノ間ニ碎氷片ヲ入レ、之ニ約 8°C 乃至 10°C ニ冷却シタ

ル、2% 硼酸水ヲ滴下シ、眼瞼上ノ溫度ヲ常ニ11°C乃至14°Cニ保タシメ、1日1回40分間施行セリ。此際結膜囊内ノ溫度ハ30°C乃至31°Cヲ示セリ。蒸氣電法ハ吸入器ヲ用ヒ、2% 硼酸水ヲ眼瞼上ニ噴霧セシム、其ノ眼瞼上ニ於ケル溫度ハ約45°C乃至47°Cニシテ1日2回、毎回20分間施行セリ。

上記實驗ハ何レモ右眼ヲ以テ實驗眼トナシ、左眼ヲ對照眼トナセリ。實驗中ハ毎日4%「リチオンカルミン」溶液ヲPro kg 4cc耳靜脈内ニ注射シ、最終注射後24時間ヲ經テ、空氣栓塞ニヨリテ動物ヲ屠殺シ、眼球ヲ剔出シテ、10%「フォルマリン」固定ヲ施シ、「チエロイデン」切片ヲ作製セリ。

第3章 實驗成績

其1 溫電法試驗

第1例 No. 64. 2120 g ♀ 實驗日數5日。「カルミン」注射總量32cc

右眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小紡錘形又ハ細長形ヲナシ、色素顆粒ハ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛様輪帶ニ於テハ少數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ小類圓形ヲナシ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在ス。毛様突起ニ於テハ稍々多數ノ生體染色陽性細胞存ス。紡錘形、星芒形又ハ類圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。

左眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小紡錘形又ハ小類圓形ヲナシ、微細不鮮明ナル色素顆粒ヲ有ス。毛様輪帶ニ於テハ少數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ小類圓形ヲナシ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在ス。毛様突起ニ於テハ實質中ニ稍々多數ノ生體染色陽性細胞アリ、紡錘形、星芒形又ハ類圓形ヲ呈シ、中ニハ突起ニヨリテ相連レルアリ、色

素顆粒ハ微細ナレドモ濃染シ、緻密ニ存ス。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、兩者ノ差異著明ナラザルモ、虹彩及ビ毛様突起ニ於ケル生體染色陽性細胞ハ、其ノ數ニ於テ右眼ニ稍々少ク、染色度亦右眼ニ稍々不良ノ感アリ。

第2例 No. 67. 2370 g ♀ 實驗日數3日。「カルミン」注射總量24cc

右眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小紡錘形ヲ呈シ、核ノ兩端或ハ一端ニ僅ニ微細ナル色素顆粒ヲ認ム。毛様輪帶ニ於テハ少數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ細長形ヲナシ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在セリ。毛様突起實質中ニハ稍々多數ノ同細胞アリ、主トシテ類圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ中等大ニシテ粗密常ナラズ。

左眼： 虹彩實質中ニ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、概シテ小紡錘形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ不鮮明ナリ。毛様輪帶ニ於テハ少數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ細長形ヲナシ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在セリ。毛様突起實質中ニ於ケル同細胞ハ稍々多數ニ存シ、主トシテ類圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ中等大ニシテ稍々鮮明ナリ。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、生體染色陽性細胞ハ各部ヲ通ジテ右眼ニ其ノ數稍々少ク、且染色度モ右眼ニ於テ稍々弱シ。

第3例 No. 69. 2050 g ♀ 實驗日數6日。「カルミン」注射總量40cc

右眼： 虹彩實質中ニ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小星芒形又ハ紡錘形ヲ呈シ、色素

顆粒ハ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛様輪帶ニ於ケル同細胞ハ少數ニ存シ、主トシテ紡錘形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在セリ。毛様突起實質中ニハ多數ノ同細胞アリ、星芒形、紡錘形又ハ類圓形ヲ呈シ、又ハ突起ヲ有シテ相連絡セルアリ、崩壊セルアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ粗密常ナラズ。

左眼： 虹彩實質中ニ於テ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小星芒形ヲナシ、色素顆粒ハ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛様輪帶ニ於テハ少數ノ同細胞アリ、主トシテ紡錘形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在ス。毛様突起ニ於テハ實質中ニ稍々多數ノ同細胞アリ、星芒形、紡錘形、類圓形ヲ呈シ、又ハ突起ヲ以テ相連絡セルアリ、崩壊セルアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ粗密常ナラズ。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、各部ヲ通ジテ生體染色陽性細胞ハ、一般ニ右眼ニ其ノ數多ク、且染色度強シ。

要之、溫電法ノ前眼部生體染色性ニ及ボス影響ハ明瞭ヲ缺クモ僅ニ生體染色性ヲ減弱セシムルモノナルベシ。

其2 冷電法試験

第1例 No. 60. 2150 g ♀ 實驗日數4日。「カルミン」注射總量 35 cc

右眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小星芒形ヲナシ、色素顆粒ハ鮮明ヲ缺ク。毛様輪帶ニ於テハ少數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ細長形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛様突起實質中ニハ稍々多數ノ同細胞アリ、星芒形、紡錘形又ハ類圓形ヲ呈シ、突起ニヨリテ相連絡セルアリ、

色素顆粒ハ中等大ニシテ緻密ニ存ス。

左眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小星芒形又ハ紡錘形ヲ呈シ、色素顆粒極メテ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛様輪帶ニ於テハ少數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ細長形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛様突起實質中ニハ稍々多數ノ同細胞アリ、星芒形、紡錘形又ハ類圓形ヲ呈シ、突起ヲ有スルアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ粗密常ナラズ。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、生體染色陽性細胞ノ數ハ右眼ニ於テ稍々多シ。

第2例 No. 61. 2450 g ♀ 實驗日數4日。「カルミン」注射總量 38 cc

右眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小星芒形又ハ紡錘形ヲ呈シ、色素顆粒極メテ微細ナリ。毛様輪帶ニ於テハ稍々多數ノ同細胞アリ、主トシテ紡錘形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ緻密ニ存ス。毛様突起實質中ニハ多數ノ同細胞アリ、星芒形、紡錘形、類圓形ヲナシ、或ハ突起ニヨリテ相連絡セルアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ粗密常ナラズ。

左眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小星芒形ヲ呈シ、色素顆粒極メテ微細ナリ。毛様輪帶ニ於テハ稍々多數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ小類圓形ヲ呈ス、色素顆粒ハ微細ニシテ密在ス。毛様突起實質中ニハ多數ノ同細胞アリ、星芒形、紡錘形又ハ類圓形ヲ呈シ、又ハ突起ヲ有スルモノアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ粗密常ナラズ。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、虹彩ニ

於ケル生體染色陽性細胞ハ右眼ニ於テ其ノ數
稍々多ク、色素顆粒モ左ニ比シ稍々鮮明ナリ。

第3例 No. 62. 2470 g ♀ 實驗日數
4日。「カルミン」注射總量 38 cc

右眼： 虹彩實質中ニ於テ極メテ少數ノ生
體染色陽性細胞アリ、星芒形又ハ小類圓形ヲ
呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛
樣輪帶ニ於テハ稍々多數ノ同細胞アリ、主ト
シテ紡錘形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ緻
密ニ存ス。毛樣突起ニ於テハ實質中ニ多數ノ
同細胞アリ、紡錘形、星芒形、類圓形ヲ呈シ、
又突起ニヨリテ相連レルモノ、崩壞ニ瀕セル
モノアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ粗密常ナ
ラズ。

左眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染
色陽性細胞アリ、小星芒形ヲ呈シ、色素顆粒ハ
極メテ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛樣輪帶ニ於
テハ稍々多數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ橢圓
形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在ス。毛
樣突起ニ於テハ實質中ニ多數ノ同細胞アリ、
星芒形、紡錘形又ハ類圓形ヲ呈シ、色素顆粒
ハ中等大ニシテ粗密常ナラズ。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、1) 虹
彩ニ於ケル生體染色陽性細胞ノ數ハ右眼ニ
稍々多シ。2) 毛樣體ニ於ケル該細胞ハ其ノ
染色度右眼ニ稍々弱シ、尙ホ右眼ニ於ケル該
細胞ハ崩壞ニ瀕セルモノヲ認ム。

要之、冷電法ノ前眼部組織生體染色性ニ及
ボス影響ハ明カナラズ。只虹彩組織ニ於テハ
稍々著明ニ生體染色性ヲ亢進セシムルモノノ
如シ。

其3 蒸氣電法試驗

第1例 No. 51. 2900 g ♀ 實驗日數
6日。「カルミン」注射總量 48 cc

右眼： 虹彩實質中ニ少數ノ生體染色陽性
細胞アリ、紡錘形、橢圓形又ハ類圓形ヲ呈シ、
色素顆粒ハ微細ニシテ粗ナリ。毛樣輪帶ニテ
ハ稍々多數ノ同細胞アリ、主トシテ紡錘形又
ハ橢圓形ヲナシ、色素顆粒ハ中等大ニシテ緻
密ニ存ス。Fontana 氏腔周圍ニ稀ニ同細胞ヲ
認ム、小類圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ鮮明ヲ缺
ク。毛樣突起實質中ニハ多數ノ同細胞アリ、
星芒形又ハ類圓形ヲ呈シ、突起ニヨリテ相連
レルアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ緻密ニ存
ス。

左眼： 虹彩實質中ニ少數ノ生體染色陽性
細胞アリ、星芒形又ハ紡錘形ヲ呈シ、色素顆
粒ハ微細ニシテ粗密常ナラズ。毛樣輪帶ニテ
ハ稍々多數ノ同細胞アリ、主トシテ紡錘形又
ハ橢圓形ヲナシ、色素顆粒ハ中等大ニシテ密
在ス。Fontana 氏腔周圍ニ稀ニ同細胞ヲ認
ム、小類圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ鮮明ヲ缺ク。
毛樣突起實質中ニハ多數ノ同細胞アリ、星芒
形又ハ類圓形ヲナシ、突起ニヨリテ相連絡セ
ルアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ密在ス。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、虹彩ニ
於ケル生體染色陽性細胞數ハ右眼ニ少シ、其
ノ他ニハ特記スベキ相違ヲ認メズ。

第2例 No. 53. 2300 g ♀ 實驗日數
3日。「カルミン」注射總量 26 cc

右眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染
色陽性細胞アリ、小紡錘形又ハ類圓形ヲ呈シ、
色素顆粒ハ微細ニシテ稍々鮮明ヲ缺クモノ多

シ。毛様輪帯ニ於ケル同細胞ハ稍々多數ニ存シ、紡錘形又ハ橢圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ緻密ニ存ス。毛様突起ニ於テハ多數ノ同細胞アリ、星芒形、紡錘形又ハ類圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ中等大ニシテ密在ス。

左眼： 虹彩實質中ニ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、星芒形、紡錘形又ハ類圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在ス。毛様輪帯ニ於テハ稍々多數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ橢圓形ニシテ、色素顆粒ハ微細ニシテ緻密ニ存ス。毛様突起ニ於テハ同細胞ハ多數ニ存シ、多クハ星芒形又ハ類圓形ヲ呈シ、稀ニ崩壊ニ瀕セルモノアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ粗密常ナラズ。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、1) 虹彩ニ於ケル生體染色陽性細胞ハ其ノ數ニ於テ右眼ニ少ク、染色度モ左眼ニ比シ稍々弱シ。2) 毛様體ニ於ケル該細胞數ハ右眼ニ稍々少キ感アリ。

第3例 No. 54, 2300 g ♀ 實驗日數 5日。「カルミン」注射總量 44 cc

右眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、小紡錘形ヲナシ、色素顆粒ハ微細不鮮明ナリ。毛様輪帯ニ於ケル同細胞ハ稍々多數ニ存シ、紡錘形又ハ橢圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在ス。毛様突起ニ於テハ多數ノ同細胞アリ、主トシテ星芒形又ハ類圓形ヲ呈シ、又ハ崩壊セルモノアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ緻密ニ存ス。

左眼： 虹彩實質中ニ極メテ少數ノ生體染色陽性細胞アリ、星芒形又ハ紡錘形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ鮮明ヲ缺ク。毛様輪帯

ニ於テハ稍々多數ノ同細胞アリ、紡錘形又ハ橢圓形ヲ呈シ、色素顆粒ハ微細ニシテ密在ス。毛様突起ニ於テハ多數ノ同細胞アリ、星芒形又ハ類圓形ヲ呈シ、崩壊ニ瀕セルモノ又ハ崩壊セルモノアリ、色素顆粒ハ中等大ニシテ密在ス。

本例ニ就テ左右兩眼ヲ比較スルニ、1) 虹彩ニ於ケル生體染色陽性細胞ハ右眼ニ於テ其ノ數少ク、染色度亦右眼ニ弱シ。2) 毛様突起ニ於ケル該細胞數モ亦右眼ニ於テ稍々少キ感アリ。

要之、蒸氣電法ノ前眼部組織生體染色性ニ及ボス影響ハ、一般ニ之ヲ減退セシムルモノノ如ク、殊ニ虹彩組織ニ於テ稍々著明ナリ。

上記實驗成績ヲ表示スレバ次ノ如シ。

(註. 括弧ヲ有スルハ括弧ヲ有セザルトヨリモ稍々弱キヲ示ス)

第1表 溫電法試驗

動物番號	左右別	虹彩	毛様輪帯	S.氏管竝ニF.氏腔附近	毛様突起
No. 64	右眼	(+)	++	—	(++)
	左眼	+	++	—	++
No. 67	右眼	(+)	(++)	—	(++)
	左眼	+	++	—	++
No. 69	右眼	+	++	—	+++
	左眼	(+)	++	—	+++

第2表 冷電法試驗

動物番號	左右別	虹彩	毛様輪帯	S.氏管竝ニF.氏腔附近	毛様突起
No. 60	右眼	+	++	—	+++
	左眼	(+)	(++)	—	+++
No. 61	右眼	+	++	—	+++
	左眼	(+)	++	—	+++
No. 62	右眼	+	(++)	—	(+++)
	左眼	(+)	++	—	+++

第3表 蒸氣電法試験

動物番號	左右別	虹彩	毛様輪帶	S.氏管並 = F.氏腔 附 近	毛様突起
No. 51	右眼 左眼	(+) +	冊 冊	(+) (+)	冊 冊
No. 53	右眼 左眼	+	(+) +	-	(冊) 冊
No. 54	右眼 左眼	(+) +	+	-	冊 冊

第4章 考 按

上記實驗成績ヲ通覽スルニ、溫電法試験ニ於テハ只1例ヲ除キ、實驗眼ハ一般ニ生體染色性減弱シ、又冷電法試験ニ於テハ、實驗眼ニ生體染色性亢進シ、蒸氣電法試験ニ於テハ實驗眼ニ生體染色性ノ減弱セルヲ見ル。而シテ之等ノ變化ハ殊ニ虹彩組織ニ於テ著明ニ認め得。即チ前眼部組織ニ於ケル生體染色性ハ個體ノ多少ノ差違アルモ概シテ眼溫度ヲ上昇セシムベキ溫電法及ビ蒸氣電法ニヨリテ減弱シ、眼溫度ヲ降下セシムベキ、冷電法ニヨリテハ亢進セシムルガ如シ。即チ眼新陳代謝ヲ亢進セシムル處置ニヨリテ前眼部組織ノ生體染色性減弱シ、眼新陳代謝ヲ緩慢ナラシムル處置ニヨリテ同組織ノ生體染色性ヲ亢進セシムルコト第1報ノ成績ト合致セリ。但シ其ノ成績顯著ナラザリシハ、溫熱ハ之ヲ持續ニ作用セシムルコト甚ダ困難ナルガ故ニ其ノ持續時間ノ比較的短カカリシタメナルベシ。

第5章 結 論

1) 眼溫電法並ニ蒸氣電法ハ、一般ニ前眼部組織、殊ニ虹彩組織ノ生體染色性ヲ減退セシメ、

2) 眼冷電法ハ反之前眼部組織ノ生體染色性ヲ亢進セシム。

2) 此現象ハ第1報ニ於テ論ゼシト同様ノ理由ニヨル。即チ(1)ノ場合ハ生體染色陽性細胞(主トシテ組織球性細胞)ノ色素物質代謝亢進ヲ來スタメ、又(2)ノ場合ハ之ガ減退ヲ來スニ依ルモノナルベシ。

擧筆スルニ臨ミ、御指導並ニ御校閲ヲ賜ハリタル恩師田村教授並ニ濱崎助教授ニ深謝ス。

主要文獻

(第1報記載ノモノヲ除ク)

- 1) Giese, Arch. f. Augenheilk., Bd. 27, S. 292, 1894.
- 2) 樋渡一夫, 眼臨, 第23年, 345頁, 昭和3年.
- 3) Hertel, Graefes Arch. f. Ophth., Bd. 49, S. 125, 1900.
- 4) 武藤直也, 日眼, 第35卷, 197頁, 778頁, 1407頁, 昭和6年.
- 5) Matsuo, Y., Arbeiten aus der Medizinischen Universität Okayama, Bd. 2, S. 579, 1931.
- 6) Michel, Graefes Arch. f. Ophth., Bd. 32, S. 227, 1886.
- 7) 杉山繁輝, 日本微生物學會雜誌, 第18卷, 1176頁, 大正13年.
- 8) 佐藤賢次, 中眼, 第23卷, 1268頁, 昭和6年.